

前回私たちは、アジヤからエルサレムに向かう途中、パウロとその一行が、いくつかの町に立ち寄ったことを見ました。ツロでは、御霊の示しを受けた弟子たちが、エルサレムに行かないよう、パウロに告げ、またカイザリヤでは、預言者アガポが、エルサレムでパウロがユダヤ人たちに捕らえられ、異邦人の手に渡されると告げることで、パウロの同行者やその人々は、エルサレムに上らぬよう、彼に頼んだのです。でも、そのことは、すでに御霊によって示されていたことですので、パウロは、主の御名のため、つまり、主を証するためなら、死も覚悟できていると言って、エルサレムに向かいました。

さてエルサレムに到着したパウロたちは、そこの兄弟たちに喜んで迎えられる。この時であったか、次の日、ヤコブに会った時はわかりませんが、彼らは、教会から預かってきた献金（物質も含む）をそこで渡したと思われます。それを受け取った人々は、当然、喜んだことでしょう。その献げものは、パウロの宣教を通して救われた異邦人クリスチャンを中心に集められたものですから、それを受けると共に、パウロの宣教報告を聞いたヤコブと長老たちが、神様をほめたたえたのは、当然の応答といえます。

ところが、その約一週間後、御霊が何度も示しておられたように、パウロは捕らえられ、苦しみを受けることになります。彼はそこでいったい何をしたのでしょうか？パウロがしたこと、それは彼自身に対してエルサレムで広められていた噂が、根も葉もないことであることを証明するために、ヤコブたちの提案に聴き従ったまでです。20-21節「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰に入っている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。21 ところで、彼らが聞かされていることは、あなたは異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、と言って、モーセにそむくように教えているということなのです」。

ペンテコステの日の聖霊降臨によって始まった初代教会は、すでにその数が幾万にも達していました。ところが、律法に熱心な彼らユダヤ人信仰者たちが聞かされていたことは、パウロが異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、律法にそむくように教えている、というものだったのです。もちろん、それは正しくありません。なぜなら、パウロは、律法ではなく、信仰による義を信じていましたが、だからといって律法を悪いものとは教えておらず、それが神のことばであるゆえに、聖いものと教えていたからです。また福音宣教のために、テモテに割礼を受けさせましたし、彼自身も、ナジル人の誓願をもって主への全き献身を表したりしていました。

ですから、自分に対する噂が偽りであることを明らかにするために、パウロは、ヤコブたちの提案を受け入れ、彼らのうちのナジル人の誓願を立てている4人を連れて宮に上り、彼らの費用を出してあげるのです。ところが、清めの期間（7日間）が終わろうとしていた時に事件は起きました。アジヤ（おそらくエペソ）から来たユダヤ人たちが、宮の中にいるパウロを見て、異邦人を入れてはいけない所に彼がエペソ人トロピモを連れ込んだと思い込み、彼を訴え、騒ぎを起こしたのです。

そんなことをしたら、自分だけでなく、トロピモの命までも危険にさらすことくらい、パウロはわかっていたから、この訴えは実に馬鹿げたものですが、でも、この「思い込み」によって、パウロは捕らえられてしまうのです。全群衆をあおりたてた彼らが、こう叫んだからです。28節「イスラエルの人々。手を貸してください。この男は、この民と、律法と、この場所に逆らうことを、至る所ですべての人に教えている者です。そのうえ、ギリシヤ人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所をけがしています」。

おそらくこの騒動は、ペンテコステの祭りの際に起こったと思われます。というのも、パウロは、ペンテコステを目標にエルサレムに向かいましたし、またここではパウロを訴えた者たちが、アジヤから来ていた者であったからです。ちなみに「ペンテコステ」とは、もともと収穫の初穂を祝うものでしたが、この時には、シナイ山でモーセが律法を受け取ったことを祝うものへと変化していたようです。ですから、パウロを訴えた者たちは、律法に熱心なユダヤ人たちに対して、しかも彼らがまさにその祭りを行っている時に、彼らユダヤ人と、律法と、宮とに逆らう者としてパウロを訴え出たのです。すると、そこでの群衆の応答も、容易に推測できると思います。人々は、殺到してパウロを捕らえ、宮の外へと彼を引きずり出しました。

実は、主イエスとステパノも、そのようにして民と律法と宮に逆らう者として殺されたのです。ですから、この時のパウロも、そのまま殺されていても決しておかしくありませんでした。どうぞ 31 節の初めを見て下さい。「彼らがパウロを殺そうとしていたとき」とあります。また 32 節の後半には、「人々は千人隊長と兵士たちを見て、パウロを打つのをやめた」と書かれています。群衆は、間違いなく、パウロを殺すつもりで打ち叩いていました。ですから、ここでパウロは、殉教の死を遂げていてもおかしくなかったのです。

でも神様には、それとは違うご計画がありました。神様は、パウロを通して、エルサレムにいるユダヤ人や異邦人にご自身の名を証させる計画をもっておられたのです。いや、エルサレムだけでなく、この後、ローマで証するという計画もお持ちでした。ですから、ここではパウロは死にません。エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告を受けて、現場に駆けつけたローマ軍の千人隊長によって彼は助けられるのです。

ただここで「助けられた」といっても、それでパウロが自由の身になったわけではありません。なぜなら、駆けつけた千人隊長は、パウロをユダヤ人たちの手からは救いますが、彼を捕らえ、二つの鎖につないだからです。その上で、彼が何者で、何をしたのかと群衆に尋ねますが、このような騒動の中でまともな回答が得られるわけもなく、みな勝手なことを言って押し寄せて来たので、パウロを兵營に連れて行くよう命じるのです。

35-36 節「パウロが階段にさしかかったときには、群衆の暴行を避けるために、兵士たちが彼をかつぎ上げなければならなかった。36 大ぜいの群衆が「彼を除け」と叫びながら、ついて来たからである」。どうぞイメージして下さい。千人隊長は、兵士たちと百人隊長たちとを率いて現場に駆けつけました。ですから、そこには少なくとも二百人以上の兵士がいたと思われます。そこに殺意に満ちたユダヤ人の群衆がいて「彼を除け」と叫びながら、ついて来たわけですから、いかに混乱状態にあったかがわかります。そして、それはある一部の人々の思い込みから始まったのです。

いかがでしょうか？パウロは、このようにして、預言者アガポが告げたように、ユダヤ人たちに捕らえられ、異邦人の手に渡されたわけですが、このことは本当に主のみこころだったのでしょうか？パウロをして、人々の反対を押し切り、なわめと苦しみの待つエルサレムに行ったことは、果たして正しかったのでしょうか？「苦しみに遭うこと、イコール、それは主のみこころではない」とするなら、パウロがこのような目に遭ったことは、みこころではなかったと言えます。でも主は、この苦しみを、避けるものではなく、そのただ中でご自身を証するよう、パウロに前もって示し、彼をそこへと導かれたのです。

では、パウロには、それを避けるという選択をする自由はなかったのか？ニネベに行って語るという主のみこころを避けて最初逃げたヨナのように、パウロには、エルサレムに行かないという道はなかったのでしょうか？もしそれが、ただ主から強制的に命じられたのであったなら、実際になわめと苦しみを受けた時のパウロの態度は、きっと消極的になっていたはずですが、でも、それを、むしろ主のみこころと確信していたパウロは、今まさに殺されかけた中でも、積極的に対応しています。

というのも、この次の箇所、パウロはユダヤ人たちに対して証をするのです。つまり、以前の自分がどのような者であったのか、そこからどのようにして変えられたのか、なぜ今自分は証しているのか、主イエスとその出会いについて彼は大胆に語るのです。結局、彼の証は、この群衆には受け入れられず、彼らはいよいよ「パウロを殺せ！」と叫ぶようになりますが、そこはパウロがどうこうするという彼の領域ではないので、彼としては主のみこころを行った、つまり、主の御名のために、なすべきことをしたということが出来ます。

以前私たちは、「受けるよりも与えるほうが幸いである」という主のみことばを、パウロがその身をもって、エペソの長老たちに示してきた、と語っているところを見ましたが、彼がそのようにして福音を必要とする人々のために、自分の持てるものだけでなく、自分自身をも与えようとしたのは、実に彼が主イエスから受けていたからです。つまり、主イエスをうちにもつことで、主の愛と恵みによって満たされていたので、他者のために自分を与えることを幸いだとパウロは考えることが出来ました。

いかがですか？今日あなたは、そのように与えることへと向かっていますか？パウロは、なわめと苦しみ、それを受けること自体に彼自身をささげたわけではありません。そのことを通して、彼が主イエスを証する機会を

得るため、そこから主を信じる者が悔い改めて救われるために、彼はなわめと苦しみにも、自分自身をささげたのです。これが主の恵みによって聖められた人の姿、私たちが目指すべき成熟したクリスチャンの姿です。

皆さん、私たちはどうすれば、「受けるよりも与えるほうが幸いである」と考え、そのような生き方へと向かう者となるのでしょうか？それを何度も唱えたら、いつかそう考えられるようになると思いますか？いいえ。パウロを恵みによって満たすことで、進んで自らをささげる者へと彼を造り変えられた主イエスを仰ぎ見ることです。なぜなら、主イエスこそ、私たちのために、「なわめと苦しみ」としての十字架の苦難を自ら進んで受けて下さった神の救い主だからです。

では、主イエスと、同じく神様に遣わされ、苦しみを受け、殉教の死を遂げた旧約の預言者たちとの違いはどこにありますか？預言者たちは皆、私たち同様、生まれながらに罪（自己中心性）を宿す者であるゆえに、みことばを語ることはできても、彼ら自身が人を救うことはできなかったのです。でも主イエスは、父なる神様が私たち罪人を救うために立てられた神の御子、救い主であるゆえに、私たちが救うことができになります。

主イエスが、この世に来られた時、主は、バプテスマのヨハネから洗礼を受けられましたが、なぜ罪のない方が、罪の悔い改めの洗礼を受けられたのでしょうか？それは私たち罪人と同じようになられるため、つまり、ご自身が罪人の代表として数えられて下さるためです。主が、水から上がられた後、天からの声がこうありました。「これはわたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」（マタ 3:17）。

父なる神様は、なぜこのように「わたしはこれを喜ぶ」と言われたのでしょうか？主イエスをして、彼が父なる神様のみこころをことごとく行う者である、というところからです。わが子の存在、それは親にとって喜びです。でも、そのわが子が全く言うことを聞かず、反抗ばかりし、しまいには自分だけでなく、他者をも傷つけるようになったら、それでも喜べますか？父なる神様は、愛のお方です。私たちが罪深い者であるとわかった上で私たちが愛して下さる方です。でも決して罪を喜ばれる方ではありません。ご自身が全く正しいお方であるゆえに、罪に対しては正しくさばかれるのです。

でもそうすると、いったい誰がそのさばきから逃れることができますか？私たちは、その自己中心さのゆえに、みこころをことごとく行う者ではないので、神様に喜ばれるどころか、悲しませる者です。でも、だからこそ唯一神様を喜ばせることのできる方、みこころを完全に行うことのできる神の御子が来て下さったのです。主は、全く罪のないお方として来られましたが、そのことを、十字架の死に至るまで父なる神様のみこころに従い通すことで証明されました。そのようにして主は神様の義の要求を満たして下さったのです。

でも、それは実に「なわめと苦しみ」の道、私たちが誰も通りたくない受難の道でした。それでも主が、そこに向かわれたのは、私たちが愛するからです。ご自身の死をもって、私たちの不義に対する神のさばきを私たちから取り除けて下さるために、主は、十字架の道を歩んで下さいました。ご自身が犠牲となられることで、罪人に対する救いの道が、恵みとして与えられることを、神様のみこころと知っておられたからです。

主のみこころは必ずなります。その中には、理解のできない苦しみや試練といったものもあります。でも、その苦しみさえ、主の御手の外にはではなく、なかにあります。主はご自身の救いのご計画のために、苦しみさえも用いられるのです。何よりも主は、苦しみの中で、ご自分を呼び求める者と共にいて、ご自身の愛と復活の力で覆って下さいます。そのようにして、苦しみのただ中で、私たちをご自身のもとへと近づけ、栄光を現わすことで、私たちにご自分を証させて下さるのです。主のみこころは、主が恵みによって私たちに行わせて下さいます。